



経営の散歩道

107回

川中経営所長 川中清司

▼赤穂浪士が去ったあとと泉岳寺では、承天和尚らが朝に夕に観音経を奉誦し延命を祈っていた。「誣訟シテ官処ヲ経 軍陣ノ中ニ怖畏センニ 彼ノ観音ノ力ヲ念ズレバ 衆怨悉ク退散セン」経文の意味は、裁判や軍議をうけて恐れおののくとき、観音さまを念ずれば怨恨から解き放たれて救われる、という。

低く力強い禅僧の読経が人々の胸に響き、赤穂浪士への思いがひとしお深まっていく。

市民の間には、生類憐れみの令をひいて、犬猫のために人間の命まで奪った將軍綱吉への反感があった。その鬱憤が浅野事件の処分の不公平でさらに増幅していた。

喧嘩両成敗は権現さまからの掟というのに、内匠頭は切腹させられ、吉良上野介はおかまいなしというお上のおさばきは片手落ちだ。今度の仇討ちはご主人のうらみをはらした忠義そのものだ。その義士を切腹させるなんてとんでもねえ。

赤穂浪士を義士とあがめ、仇討ちを武士の鑑だ壮挙だとほめたたえる気運は、日ごと高まっていた。

▼学者の間でも議論が対立した。

幕府の文教の中心に立つ林大頭信篤は、法律論から言うならば亡君の仇を討ったとはいえず天下の法を犯したのであり処断すべきだ。しかしその行いは、まことに立派な「忠臣義士」である、と肯定の立場に立ち、「復讐論」を発表した。

室鳩巢も「赤穂義人録」を書



赤穂義士と萬慶寺

その4

いて、浪士の義挙を認めている。山崎闇斎門下の佐藤直方は、義士を否定した。内匠頭を切腹させたのは幕府であり吉良が殺したのではない。その吉良を相手に仇討ちするのは的はずれで、討ち入りの仕方は徒党を組み武装した戦であり大罪である。泉岳寺に引き揚げた折に切腹するのが筋だという。

萩生徂來は切腹させるべきだという。

主君の仇を報じたのは武士の道として正しい。しかし内匠頭が殿中で吉良を切りつけて罪に処せられたのを不満で、公儀の許しもなく仇討ちの挙にでたこ

とは、法に於いても許しがたい。浪士に切腹させることは武士としての礼を守り、その忠義を認めることになるというのだ。

▼甲府中納言綱豊は、間もなく西の丸老中となり七年あとには六代將軍家臣となるのだが、その邸はすでに江戸城郭内の日比谷御門外にあった。

「赤穂浪士は主の仇を討った天晴れ誠忠の者どもじゃ」と、綱豊は評価していた。

間部詮房は、綱豊のブレーンとして側用人の職にあり、ご用繁多のため桜田御門に居を賜るほど厚い信任を得ていた。

詮房は綱豊の意を汲んで赤穂浪士助命の策をめぐらしていた。

新井白石は、気鋭の学者として評判が高く、間部と共に綱豊を支える双壁であった。しかし綱豊に次の將軍の座が見えかくれる今、ここは黙って推移を見守るべきだと主張した。

▼大石内蔵助は、安穩に送るお預けの日が長びくにつけ、浪士達の心が動いていくのが怖かった。

切腹を誓った。討入りに当たってはもし失敗すれば吉良邸に火を放ち腹を切る決心だった。吉良の首をはね泉岳寺に引揚げたあとは主君の墓前でさし違えて果てる覚悟もできていた。

しかし時の経過は人を変える。仇討ちの本懐を遂げた充実感、追想の日を重ねるにつれて、やがて執着にかわる。

世間があげて浪士をたたえ、人気が高まるほど、己れを美化しうめばれていく。

もしかしたら義士として命長らえることができるかもしれないと、一度は断ち切った筈の生の諦めが、再び未練となって募っていくのではないか。

「このままに皆が死を賜ることこそ、忠義の人として生き残ることとなるのだ」

内蔵助は自らにそう言い聞かせた。

▼矢頭右衛門七はまだ十七才、討ち入りでは刃渡り三尺あまりの長巻をふるって奮戦したが、兜頭巾の中には亡き父の戒名「四月霜光居士」と書いた紙片を納めていた。

大石主税は紅顔の十五才、短冊に次の歌をしるして戦った。あふ時は語り盡すと思へども別れとなれば残る言の葉

「子としての思いをもっと父母に話したかったであろうに」内蔵助はまだ少年の二人の面影を、うるむ臉のなかに浮かべるのであった。